

枕蹊雜話

三

梅

家傳

庫文閣内			
五	三		和
九	四		書
函	一		
	〇		
	二		
四	八	號	類
架	冊		

内閣文庫			
番號	和	34102	
冊數		8 (3)	
函號	159	58	

共八



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

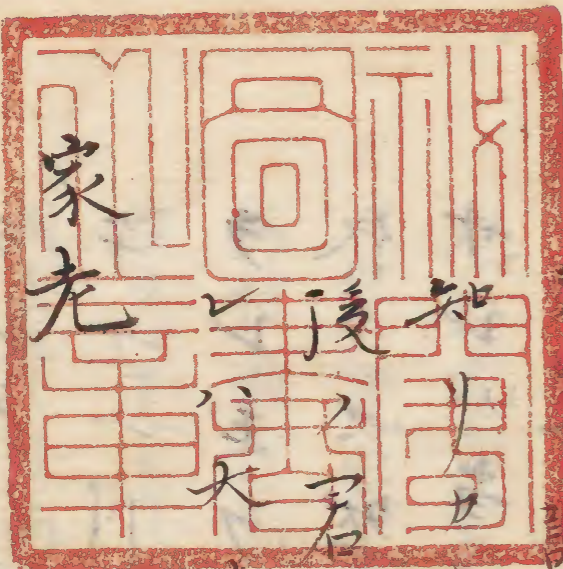
Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



桃蹊雜語卷三



公、御代官職ヲ定メ玉ヒシ夏ツマヒ
セルモノヲ見サレハコトニク
クシシハラク愚考ヲ識シテ
子ヲ待ツ識者加筆セラ
幸ナラン

御代記ニ慶長十二年十月末三月五日

家老中山雅樂即丹治信吉ヲ付サセ
ラル云々是ヨリ以前慶長十一年丙
午十一月常陸國下妻十方石ニ封セ
ラレ玉フ時ニ朝比奈右兵エヲ以テ城
代トス然レ氏家老ト稱スル事見ヘ
サレハ当職ノ稱号中山ニ始ル也

久徵曰是ヨリ以下諸職古人ヲノ沿
草ヲ集禄ニ官庫ニ納セントス
未夕稿ヲナサス天吾ニ數年ヲ加シテ
卒業ニ願フナリ

准家老

慶長中雜賀孫市三千石ヲ賜ヒ家老ニ准セラル

諸大夫

元和元年三月廿三日中山雅樂助從五位下ニ叙シ備前守
ニ任ス是家老任官ノ始ナリ同七年四月水野彈正少
弼村瀨左馬助此三人幕下ニ在ルトキ二人ヲ幕府ヨリ附サ
セラル是ヨリ任官ノ者三人ナリ寛永十二年松平壹岐守
同志摩守兩人ヲ附屬セラレ諸大夫五人ナリ是ヨリ今
ニ至マテ任官家老五人ナリ

城代

慶長十一年下妻ノ城代トシテ
東照宮ヨリ朝比奈右兵工尉附ケサセラル同十四年水戸
ニ封シ遷サレ玉フ時水戸ノ城代トナル同十五年芦澤伊
賀又城代ニ任シ右兵工尉ハ本丸ヲ守リ伊賀ハ二ノ丸ヲ
守ル正保元年ヨリ西丸城代一人トナル

案ニ當職ノ改更ニ関ル事ハ寛永二十年松平壹岐守
芦澤伊賀コノ役ニテ徐令ヲ諸士ニ達スルヲ旧記ニ見エ
タレハ此前後モカクノ如クナルヘシ然ルニ延宝二年鈴木
石見守當職ニ任スル時條目ヲ出シ玉ヒコノ外ノ所用ハ

免シ玉フノ命ヲ蒙ル是後今ノ如クニハナリタル歌

高家

寛永年中名家ノ人ヲ召抱ヒラレ高家ト稱シ拾別ニ優
待シ玉フ所謂上杉兵部徳大寺左兵工松平八左工門守
都宮彌三郎ナリ外ニ村上道樂ハ准高家ナリ上杉徳
大寺松平ハ中山大膳信治
備前守信吉カ三男ニテ別録ヲ賜ヒ家老トナリ後兄信正カ養子トナリ備前守ニ任
方上ニ列ス後宇都宮ハ家老ニ准セラレ村上ハ大番頭ノ上ニ列
ス其後ニ夫々ノ職掌ニ任シ其職ノ坐位ニ列スコノ外ノ
後高家ノ稱号ナシ

大寄合頭附寄合指引

當職ノ原始未夕詳ナラス田代梅澤蔭山又十郎等慶
長年中寄合組トアレハ其頭タル役アルヘシ然レモノ頃
諸職全備セサレハ家老等ヨリ兼子ニヤ元和未年ニ
至テ真木隼人當職ニ任シ家老ニ准シ与カ五騎同心ニ
人ヲ附マラル是ヲ以始トスル歌寛文年中ニ至テハ
老中ヨリ當役ヲ兼又天和元年酉正月十五日鳥居
瀬兵工當役ノ本職ニ任シ是ヨリ兼職ナシ

案ニ當職ハ寄合并ニ諸役人類一役ヲ以テ軍役
ニ満たサル輩ヲ寄合ト号シ此職ニテ支配セシナリ
然ルニ何ノ比ヨリカ其事ヲ止メラレ寄合組ハ寄合指

引ノ支配トナレリ頭ハ名ノミニテ組ナク諸役人ハ
若老ノ支配トナレリ

寄合指引

寛文四年辰十二月廿八日佐野勘兵工藤次郎左エ門水
野外記三人ヲ以初テ當職ニ任スイツレモ前ノ寄合ニ
テ此吏ヲ勤メシト見ユ今ハ布衣以上トナレリ委ク
ハ別録ニアリ

老中

元和ノ始メ三木仁兵工大番頭ヨリ當役ヲ兼ヌ寛永
三年伊藤玄蕃飯田新工門兩人書院番頭ヨリ當

役ヲ兼子是ヨリ三人トナル同十年彦坂織部白井忠
左工門ヲ加ヘテ以後五人トナル万治元年戊六月十三日
梶川弥三郎書院番頭列トナリ當職ニ任ス是レ本職
ヲ置ル、始トス然レハ此外ノ輩ヲクハ兩番頭ヨリ兼
職ス元禄八年庚二月廿日寛助大夫大番頭上坐加
藤四郎工門書院番頭格トナリ當職ニ任セシ以來
兼職ナク本職トナレリ委クハ別録ニアリ爰ニ略ス

大番頭

此役ヲ置レシハ慶長年中ナルヘケレト未タソノ證
ヲ得ス元和ノ初メ三木仁兵衛一番組寛助大夫二番組當職

ニ任シ与カ同心ヲ附セラル元和九年門奈三工門三番組
尾崎喜助四番組佐野兵左工門五番組雜賀孫市六番組岡崎平
兵衛七番組五人ヲ増シ是ヨリ七人トナル各組頭二人ツ十
リ大番組ノ輩小姓ヲ兼子或ハ普請奉行矢倉奉
行又ハ兩金奉行ヲ兼スル 威義ニ公ノ御代マテハ
間々見ヘタリ

書院番頭

當役ヲ置レシハ寛永三年二組ニ定メラレタルヲ始トス
ト相續記ニ見エタレト不番ナリ内藤半之丞元和元年
乙卯十月當職ヲ命セラレシト彼譜中ニ見ヘタレハ此

時己ニ當職ノ役名アリモシクハ其役アレヒ組合等ノ支
ナカリシカ寛永三年邸上浴ニ依テ組合ケ人数等ツ定
メラレシニヤ寛永十一年一組同十二年一組ヲ置レ四組トナル
組頭各一人ツナリ初ノニ置レシ一番組ノ頭伊藤玄蕃ニ
番組飯田新エ門ナリ何レモ老中ヲ兼ヌ又三番組ノ頭朝
比奈宇エ門四番組山野辺彌八ナリ同十三年五番組
ヲ置レ頭ハ小野角エ門ニテ 義公ノ傳ヲ兼ヌ又同十七
年ニ六番組ヲ置レ頭ハ内藤儀左エ門アレモ 義公ノ傳
ヲ兼ヌ以上ニ組ヲ邸部屋書院番ト称シ 義公ニ附
属セラレ 威公邸代ハコノ六組ナリ

義公邸代ニ至テ寛文五年九月十五日七番組ヲ置レ頭
ハ穂坂八郎エ門ナリ是ヨリ以後今ニ至テ七組ナリ昔ハ
水戸江戸ト別レテアリシカ邸登城ノ供奉セシハ見エ
タリ何ノ比ヨリ定水戸ニ定メラレシカ未考ヘス近頃マ
テ大城ノ番組割ハ一三五六七四二ト七組ヲ次第シテ番ヲ
ナセリ當職ノ組古老ノ談ニ番組カクノ如キハ江戸ヨリ
下リタル頃ナリト云然ラハ二番組四番組ハ定江戸ニテ
後水戸ニ下リシナルヘシ寛文十二年ノ比ヨリハ七組皆
水戸ニアリト見ヘテ番帳アリイツレ寛文三年七番組
ヲ置レシ後今ノ如クニハナリシナルヘシ猶追テ考フヘシ

若老 又奉行

寛永十二年始テ此職ヲ置レ奉行ト稱ス三木五兵衛
小田宮内左エ門ヲ以此職ニ任格或書院番頭次ニ列ス
常ニ水戸ニ任ス寛政七年三月十一日一人ヲ増シ是ヨリ
江戸エ交代ス延宝五年閏十二月十八日伊藤セ内當
役任シ馬廻リ頭ヲ兼子与カニ騎同心十六人ヲ附マ
ラレ役料二十人扶持ヲ賜フ時ニ七内本録三百石七年
十二月廿五日役料ヲ改テ三百石トス以後恒例トナル元
録六年十月十八日格式ヲ改メ以後任スル者ハ土藏番
頭ヲ次坐ニ定メラル寛延三年十二月四日役名若

年寄ト改メ格式大番頭ト定メラル然レ是時ノ大番頭古役
天野孫七上坐タルヘキ旨命セラルシ以テ已後本職番
頭ノ上ニ列ス寛政四年二月朔古名ニ復シ奉行ト稱ス又
改二年八月十五日又若年寄ニ改メラル人数或ハ之或
ハ三人或ハ五人今常水戸エトナル當職ニテ鷹方厩方
ノ懸リヲ兼ス

供番頭

寛永十二年市川ニ左エ門ヲ以テ始テ此職ニ任ス同十五年
一人ヲ増シ慶安四年六月又一人ヲ加ヘテ三人トナリ總使
役ヲ勤ム後新廊下番頭ト稱ス又供番頭ニ復シ元禄

五年五月十日此役ヲ罷ラレ頭ハ皆馬廻頭トナル

新番頭

組ハ元和年中ヨリアリ江戸詰ニテ今ノ小十人組ヲ勤
メナリ小十人組ヲ置ルニ及テ常水戸トナル寛永五年
始テ三組ヲ定ラレ當職三人ヲ置ル久世十大夫ハ三番組
ノ頭ニテ本城ノ苗守居ヲ兼ヌ格式上寄合ノ次坐列
ス万治年中ヨリ今ノ格式トナル 義公御代ニハ
此組ヨリ小姓ヲ兼ヌル者数人見ヘタリ

進物番頭

慶安四年六月始テ三人ヲ置ケリ未タ組合ケナシ

元禄五年五月十日三組ニ分ツ此組ノ内普請奉行ヲ
兼ヌルアリ

奥方番頭 水戸江戸

寛永十二年朝比奈七郎左エ門始テ此役ニ任シ与カニ
騎同心二十人ヲ附セラル是水戸奥方ナリ寛文三年
九月十五日駒井三エ門小姓頭ヨリ當職ニ任シ与カラ
附セラレス以後今ニ至テ与カラ附セス

寛永ノ初弟根伊左エ門江戸奥方番頭ニ任シ格式苗
守居同心頭ニ同シ是ヨリ後格式不同或ハ持筒頭ア
リ或ハ苗守居同心頭ヨリ兼職アリ元禄六年十一月

朔遠山九郎エ門當役ニ任シ格式水戸奥方番頭ノ次吐
トナル

用人

寛永十二年始テ此職ヲ置ル望月五郎左エ門塩谷
与左エ門是ニ任シ總領番頭ヲ兼ヌコノ後四人ヲ増シ
六人トナル慶安四年足輕二十人ヲ附セラレ寛文四年
十二月廿八日 義公馬廻組六十三人ヲ置ルコノ時馬廻頭
ヲ兼ヌ是ヨリ以前是年閏五月十九日足輕ヲ止メラレ
役料現米五十石ヲ賜フ宝曆七年十二月廿五日小笠原
五兵衛格式進物番頭トナル是ヨリ後功勞アルモノ此格

ニ進ム當役ノ人数一定セヌ或六七人或八九人又十二人ニ
至ル時ヤリ享和元年四月廿六日定水戸二人定江戸二人ト
定メラレ現米五十石ノ役料ヲ止テ定江戸物成百五十
石定水戸七十五石ト定メラル安永天明ノ間寺社奉行
ヲ兼職セシカ今是ヲ止ラル

小姓頭

慶長年中小姓ノ稱号見ヘタレニ未タ其長ヲ立テ玉
ハサリシト見ヘタリ元和元年伊藤久内コノ職ニ任
ス是ヲ始メトスルカ續テ飯田權之助神田彦六等
此職ニ任ス天明五年三月廿四日當役ヨリ用人見習

ヲ命セラル

勘定頭 附勘定目附

元和中 三木五兵衛朝比奈七郎工門當役ニ任シ
格式旗奉行ニ同シ寛永十二年此役ヲ止メラル又コノ
役同時ニ勘定目附二人ヲ置ル小田宮内左工門望月五

郎左工門是ニ任スコレ亦寛永十二年ニ止メラル

奉行ノ条
ニ載セタリ

勘定奉
行ノ別物

旗奉行

元和中 櫻井豊後小松丹波兩人コノ役ニ任ス寛永
ノ初望月角彌ヲ加ヘテ三人トナル明暦二年二月ヨリ

証又二人トナル

案 寛永末年 郡廳ノ旧記ニ在クニ旗組ヲ

置レ誰 某組誰カト姓名ヲ記セリ又鎗奉

行ノ組及ヒ卿步行等皆土着ナリ何レモ

奔走ヲ專ラトスル者ナハ斯 土着ニハナシ

玉ニケン今ニモ能ク田章ヲ考ヘナハ古ニ復

セニ更 難キニ有ルヘカラス

鎗奉行

元和中 大田十郎兵衛望月角彌二人當役ニ
任ス寛永ノ初小川内藏助ヲ加ヘテ三人ナリ是

ヨリ又二人トナリ或ハ四人トナル寛文十一年以来ニ
人ト定ラレ今ニ至ル組ノ支ハ前ノ考案ニ述カ

如シ

町奉行

慶長十四年市川三左エ門小田宮内左エ門西人ヲ
當職ヲ任ス与カ十騎同心三十人ヲ附セラル
此時諸職未タ定ラサルヲ以諸士ノ觸レ流
シ等ヲ兼スト云是奉行ヲ置レサル以前ナ
ルヘシ何ツノ比ヨリ与カ四騎トナルカ可考

持弓頭

慶長ノ末三木仁兵エ當役ニ任シ且輕五十人ヲ
附セラル元和申伊藤玄蕃大竹御左エ門ヲ
コノ役ニ任ス足輕組合ケ不詳寛永ノ初ヨリ
三組ナリ是ヨリ後或ハ四組又三組トナル寛
永ノ頃ハ足輕三十人ナリ今ノ如二十人ナリ
シハ未考

持筒頭

元和元年算助大夫當役ニ任シ且輕五十人ヲ
附セラル寛永ノ初メヨリ三組ナリ後一組ヲ増
シ又是ヲ止ラル何ノ比ヨリカ且輕二十人ツトナ

未考享保十二年十二月廿七日持弓筒頭トモ持
鎗ノ外ニ纏ヲ待スヘキノ命アリ持人料ヲ賜フ
以後恒例トナル

手筒頭

蔭山四郎兵工算善兵工等元和中當役ニ任
シ午カ或六騎同心三十人ヲ附セラル寛永以後
止メラレシト見ヘテ諸旧記ニ見ヘス

通事

元和ノ初榎本治部若林因獄木内淡路木
内勘弥等當役ニ任ス人数定限十ノ或八人

或ハ七八人十余人ニ至ル時モアリ貞享四年四月

三日役名ヲ大小姓ト改メラル案上ノ説非カ鶴殿ヲ勝

リ通夏ヲ勤ム横山左七寛文四年大小姓トナリ通夏ヲ勤ムト其
譜中ニ見コ及寛文八年規式帳モ大小姓トナル時ハ貞享
以前大小姓ノ称呼アルヲ明ケシモシクハ通夏ヲ兼スル
ヲ止ラレテタ、大小姓トハカリ称セシカ追テ可考

延享二年十月十五日又通辭ト改メラル先人清洲、

有徳公西城ニ移リ玉ニシ後 大御所ト
称シ奉ル其称呼ノヒキ似タルヲ憚改ラレト云
ニ改ラレシ夏未考 今ノ通夏ノ文字

御前小姓 次小姓

小姓 稱号ハ慶長ヨリ往々見ヘタレ元御前
御次ノ差別何ツ比ヨリ定メラレシカ未考寛

文中ニハ既ニ其差別見ヘタリ

小十人頭

又五十人組トモ云ヘリ其人数五十人アルヲ以テ
ナリ寛永ノ初朝比奈宇エ門川澄勘ケ由二人
初テ此役ニ任ス同十一年二人ヲ増シ後二人ハ
美公時ニ未タ附屬セラル寛文ノ初ノヨリ七年ノ
比ハ三人ナリ同八年五月廿一日三人ヲ増シ六人ト
ナル然レ氏組合ケハ無カリシト見ヘタリ元禄六
年正月二十七日始テ三組ニ合ケ毎組組頭一
人ヲ置

歩行頭

慶長十二年弓削五郎八三木仁兵衛等コノ職ニ任ス
説ニ大竹御左エ門肥田和泉神田彦六三木ヲ加ヘテ此
役ヲ始トス然レ元和年中ノ奉仕ナレハ此一説ハ
誤リナルヘシ寛永年中六組ニ合ケ毎組々頭一人ツナ
リ御歩行トテ土着ノ者アリ又力量被君ノ者ヲ撰
テコノ役ニ附屬セラル

目附

コノ役古ハ横目ト稱セリ元和九年岡部次郎兵衛野
々山藤兵衛能勢三郎エ門佐野弥左エ門萬澤清左

工門五人ヲ以テ始テ當職ニ任ス後一人ヲ加ヘラレ又寛永
ノ末年三人ヲ増シ慶安四年一人増都合十人ナリ又十一
人トナル是ヨリ人数増減アリ正保ヨリ正徳ニ至テ當
職ノ内一兩人ツ、先手足輕頭ヲ兼ス或ハ武器奉行又ハ
御城附ヲ兼スルアリ正徳ノ後是ヲ止メラレ享和二年
以來人数八人ニ定ラレ

御城附

寛永十一年御上洛歸御ノ後此役ヲ置ル香取助十郎
存藤市工門ヲ以テ始トス正保三年十月二十三日兩人
目附ヨリ兼職ス慶安三年九月目附ヨリ西九御城付

ヲ兼テ是西九附ノ始ナルヘシ是又二人ニテ勤ニ所貞享元
年正月廿七日西九附ヲ止メラレ是ヨリ後再々西九附
二月廿五日西九附ノ副役一人ツ、シ置ル是ヲ止メラレ、
寛延三
年十一月三日西九附一人ツトナル天明元年正月十三日横
山甚左工門當役ニテ小姓頭格トナリ後用人ノ列ニ進ム
是ヨリ以後當役切當ノ以テ格ヲ進ムル者アリ

使番

元和ノ初メ此後十人ヲ置ル正保四年是ヲ止メラレ享保
十年二月十一日再々此役ヲ置レ勤方腰物番勤來ル如
ク諸方ノ使廣間番且火支等ノ時供奉ノ命セラル

人数シツク増減アリ寛政二年五月廿九日十人高ト
ナルニ月十一日再ニ此役ニ任ズル者ハ
先手同心頭 此ノ人ハ
初ノハ足輕頭ト稱ス

元和ノ初年ヨリ此役名見ヘタレ氏弓鉄ノ差別ツコヒ
ラカナラス寛永ノ初弓頭六人鉄鉋頭十二人ト見ヘタリ
初メハ足輕三千人何比ヨリカ千人トナル享保十二年
十二月廿七日持鎗ノ外ニ纏ヲ持スヘキ命アリ持人料ヲ賜
フ同十四年二月廿八日弓組鉄鉋組ト云フ稱号ヲ止テ
一組二十人ノ内ニテ四人弓十六人鉄鉋ト定ノラル

側同心頭

元和四年額田久兵衛此役ニ任シテカ六騎同心五十人ヲ
附セラル寛永三年致仕シテ後ノノ役ナシ宝永五年正
月十一日再此役ヲ置レ義濃郡又五郎是ニ任ス享保四
年二月三日又此役ヲ止ラレ

水戸留守居足輕頭

元和中芦澤勘兵衛當役ニ任ス寛永ノ初ニ至テ六人
トナル正保元年一人ヲ増シ寛文八年三月廿二日二人ヲ
加ラレ九人トナリ延宝三年二月朔二人ヲ減シ是ヨリ
七人トナル

江戸同

寛永ノ初藤田弥工門天野勤兵工荒川十郎左工
門高屋清大夫等當役ノ勤ム以後増減アリ
庭同心頭

寛永中牧野七兵工和田道也二人當役ニ任ス是ヨリ
後或ハ兼職トナリ多クハ一人勤ナリ

船手頭

元和元年渡邊織部初テ此職ニ任ス水主數十人
ヲ支配ス

郡奉行

元和年中近藤次郎左工門河村惠左工門熊澤半左
工門當役ナリ是ヨリ後或ハ四人或ハ五人一定セズ宝永
二年十二月御改改ニ依テ當役ヲ止ラレ六年二月又
元ニ復ス時ニ五人ナリ各組ヲ合ツテ武茂南

太田松岡野ニ上ト云宝曆元年正月廿八日一郡
野ヲ減シ村落ハ其扱フ近隣ニ入寛政十一

年八月廿四日代官ノ役ヲ止ラレ當役ニテ兼
又田見小路良公御代御別館ヲ當ニ玉ヒシ御殿ノ跡ニ

役所ヲ構ヘ濱田組常葉組ノ兩郡宰是ニ任
ス兩郡宰是ニ任シ支配手代元々等常任是

ヨリ追々所々陣屋ヲ建テ郡奉行各手代
シ率ヒテ彼陣屋ニ移ル其所ニ六荒川石
神ス小菅^{後止}大里八田鷺子^{後止}増井^{後止}紅葉
大子凡八ヶ所ナリ後ニ追ヒ止ラル今五ヶ所残
レリ

割物奉行 後改大吟味又勘定奉行

寛永十五年長谷川五大夫津田作左エ門駒井
又兵工三人ヲ以テ當役ニ任ス是ヨリ以後人数
増減アリ宝永二年十一月廿五日役名ヲ大吟
味ト改ムコノ比御改改ニ依テ當役ヨリ所務

代役金奉行請方役等ヲ兼ス又原忠エ門ハ格
式先手同心頭ニ進ミ関口九郎次郎ハ當役ヨリ
用久ニ轉ス當役ハ入ヲ量テ出ス支シ計ル
勘定奉行年中ノ總會計監スト云文化九年二月
九日勘定奉行當役ヲ兼子并ハ七一役所トナル勘定
奉行ハ勘定頭同時ニ置ル

金奉行

慶長十四年布施与兵工始テ此役ニ任ス元和元年
海野理エ門亦此役トナル宝永五年七月三日當職ヲ
止ラレ大吟味役ノ兼職トナル六年三月八日再ヒ此役

ヲ置

役金奉行

寛永年中猪飼彦兵衛岡部忠左衛門等此役ニ
任ス是ヲ始トスルカ未考慶安ヨリ寛文ニ至テ書
院番大番組ヨリ兼職ス宝永五年八月十八日此役
ヲ止ラレ七年六月再ニ此役ヲ置ル

大納戸奉行

元和年中近藤金左衛門石井仁工門此役ニ任ス寛
文延宝ノ比大番組又ハ新番組ヨリ兼職ス其後小納
戸役吟味役等ヨリ兼ス

代官頭

正保年中始テ此職ヲ置明暦三年ノ後此役止

代官

當職慶長十四年大森作兵衛田中助工門鈴木金次
新家忠工門等数人ヲ命セラル寛永比廿一人ナリ
美公御治世ノ比ハ郡奉行五人代官六人兩人ハ諸
民ヲ治ル重職タルヲ以テ五臟六腑ニ表シ玉ヒト
古老ノ傳説ナリ宝永五年三月廿四日此役ヲ止ラレ
六年二月七日元ニ復ス宝曆元年正月廿八日一人ヲ
減シ五人トナル寛政十一年八月十四日當役ヲ止ラレ

郡奉行此役ノ夏ヲ撰シ行フ

普請奉行

慶長年中深澤四万之助朝比奈七郎工門當役ニ任ス
是ヨリ後寛永年中ニ至テ二三百石ヲ領スル録高ノ
者ニ命セラル此比 公義卿普請御手傳ニタル故如
此カ正保ヨリ以来小十人組小姓目附或ハ与力等ヨ
リモ命セラル近來吟味役ヨリ兼職シ今ハ本職トナル
材木奉行

寛永年中下條庄兵工此役ニ任ス水戸江戸ト合ル或
ハ一人或二人後或兼職アリ江戸ハ天明三年十月三日

普請奉行ニ属シ水戸ハ寛政四年二月十九日普
請方ニ属セラレ此後止

矢倉奉行

寛政中板倉主税此役ニ任ス正保ヨリ元禄

初メニ至テ間ニ大番組馬廻組等ヨリ兼ス
寛延元年五月十五日長谷川多吉格式大番組
ニ進メラレシ以後功勞ヲ以テ格式ヲ進メラル

小川運送奉行

寛政年中小川市工門當役ニ任ス

有奉行

寛政年中ヨリ往々當役ニ任スル者見ヘタリ又番組ヨリ兼職スルアリ

奥賄頭

元和中寺門孫左工門コノ役ニ任ス天明寛政ノ比ヨリ吟味役等ヨリ兼職ス

小姓目附 新料理間番

元和中伊藤太左工門小宅清兵工等コノ役ニ任ス寛文年中役名新料理間番ニ改ム天和元禄ノ比ヨリ兼職アリ宝曆八年十月小姓目付ニ復シ天明元年四年ニ江戸水戸共ニ當役ヲ

止ノラル

臺所頭

元和元年岡村九工門此役ニ任ス

唐物奉行

元和中河西源左工門此役ニ任ス延宝ノ比小納戸役ヨリ兼ス宝永五年四月朔豊田兵工門當役トナリ享保十二年三月致仕ソノ後當役ヲ歩ラルカ

儒者

寛永中人見ト幽岡部拙斎过子の等或ハ四百

石或三百石ヲ賜テ儒者トナル

醫師

元和寛永ノ間吉田祐益生熊作庵教原清庵
等ヲ医師ニ命ズ是ヨリ後寛文ノ比ニ至テハ
四五十人トナル然レ凡其中儒ヲ業トスルアリ又
武ヲ業トスルアリ池原源定如キ是ナリ君邊
ニ親スルヲ以テ形ヲ醫師ニ類スルアリ

殿預

慶長十四年望月午三ノ門既預トナル是始ナリ
ルヘシ元和四年関口八ノ門水戸殿預其子六助ハ

江戸既ヲ預ル又寛永中ニ南領廿樂村ニ既アリ
是其所牧ナリ以テナルヘシ後ニ若宮村ニ移
サル各既預リアリ延宝中大能ニ牧ヲ移サレ
牧ノ馬屋預リナシ

腰物奉行

元和年中城所瀬兵工當役ニ任ス

右筆

慶長十四年松岡市左ノ門初テ當役ニ任シ
威公ニ御手跡ヲ指南ニ奉ル其後猪飼傳工
門兄弟高屋清大夫等當職ニアリ皆上ノ右筆

ナリ又末^{末ノ}右筆アリ後右筆組頭ヲ置シ上ノ右筆ハ止ム

奥右筆 日帳役

初メ御用ノ日帳役ト称ス末^{末ノ}右筆ヨリ兼子^勤勤メ又ハ小十組ノ中ヨリ雇テ勤シム安永年中奥右筆ニ改メ後日帳役ニ復シ今又奥右筆トナル

中山組付

寛永三年御上洛ノ時組付数筆ヲ附セラル是始メナルヘシ人数未詳此後或ハ二十騎三十

騎五十騎ノ取アリ今三十騎ナリ

中山与カ

慶長十三年正月廿九日八王子士ノ中武功アル者十七人ヲ撰テ中山備前守信吉ニ附属セラル其禄三千五百石ノ御朱印ヲ賜フ後大城淨光寺口ノ番ヲ勤ム天和元年二月廿八日免サレ中山ノ家士ニ准ス元禄十四年八月廿四日中山ノ家臣トナル是全ク中山家士ノ外ナレハ今ニ其人數ハ備置ト見ヘタリ

威公御世官職ヲ置キ玉ヒシ大概カクノ如キカコノ

